国際心理科学連合 (IUPsyS) と国際心理学会 (ICP)

今田 寛¹⁾

Brief history of ICP (International Congress of Psychology) and IUPsyS (International Union of Psychological Science)

HIROSHI IMADA¹⁾

Abstract This article consists of four parts: (1) a brief history of ICP, (2) a brief history of IUPsyS, (3) the international visibility of psychological research in Japan, and (4) closing remarks with reference to the Yokohama ICP2016. The congress sites, countries, continents and the record of attendance of thirty ICPs for the period 1889-2012 are summarized and reviewed. The history of the organizing committees of ICP which have developed into IUPsyS is also summarized and reviewed. The Japanese Psychological Association (JPA), one of the 11 charter members of IUPsyS, has played an important role for IUPsyS, but the academic visibility of psychological research in Japan was found to be disproportionately low internationally relative to its contribution to IUPsyS and the high rate of attendance of Japanese psychologists at recent ICPs. Some suggestions for and expectations on the Yokohama ICP2016 were proposed.

Key words : ICP, IUPsyS, Japanese Psychological Association, Yokohama ICP2016

本報告は、国際心理学会 (International Congress of Psychology, ICP) とそれを主催する組織、国際心理科学連合 (International Union of Psychological Science, IUPsyS) について、その歴史と日本心理学会との関わりについて解説し、2016年に横浜で開催が予定されている第31回 ICP に備えることを目的とする。内容的には2011年9月17日に開催された日本心理学会第75回大会におけるシンポジウム「ICP2016を意義あるものにするために」における私の話題提供「Brief history of ICP: Lessons from the past」にほぼ準拠しており、以下の4部から構成されている。1. 国際心理学の歴史的概観、2. ICP の主催組織 IUPsyS について、3. ICP における日本の心理学の存在感、4. 終わりに：横

浜 ICP2016の成功に向けて。

1. 国際心理学会の歴史的概観

Table 1 は、1889年に始まり2012年に第30回を迎えた ICP の歴史を要約したものである。左から順に開催都市・国・大陸、参加者数、出席者数上位国、主催組織及びそれへの日本代表者などに関する情報を、主として Rosenzweig, Holtzman, Sabourin, & Bélanger (2000) を参考にして要約した。

(1) 第1回大会：第1回大会は、エッフェル塔が呼び物であったパリ万国博覧会に重ねてパリで、名誉会長 J-M. Charcot, 実行会長 T. Ribot のもとで開催された。4大テーマをそれぞれの主宰者と共に示すと、幻覚 (H. Sidgwick), 催眠 (J. R.

1) 関西学院大学名誉教授

〒662-0822 兵庫県西宮市松籟荘9-9
連絡先：今田 寛
E-mail: imada0530@yahoo.co.jp

1) Professor Emeritus, Kwansei Gakuin University

Corresponding author: HIROSHI IMADA

Published online in J-STAGE: December 28, 2012
doi: 10.2502/janip.62.2.4

Table 1. Sites, attendance, and organizing association of ICPs 1889-2008

	年	開催地		出席者数・参加国数		出席者数 上位国			主催組織 日本代表			
		開催都市	開催国	開催大陸	会員	合計	国数	1位 %		2位 %	3位 %	
	1	1889	Paris	フランス	西ヨーロッパ	204		21	ホスト 63	ロシア 9	ドイツ、イギリス 5	International Committee
	2	1892	London	イギリス	西ヨーロッパ	300+			ホスト 67+			
	3	1896	Munich	ドイツ	西ヨーロッパ	455			ホスト 59	オーストリア 7	アメリカ 6	
	4	1900	Paris	フランス	西ヨーロッパ	430			ホスト 45	アメリカ 9	イギリス 6	
	5	1905	Rome	イタリア	西ヨーロッパ	440			ホスト 53	フランス 14	ドイツ 5	元良勇次郎／榊保三郎
	6	1909	Geneva	スイス	西ヨーロッパ	582		28	ホスト 42	フランス 17	イタリア 9	
	1913			アメリカ	北アメリカ		開催されず					"/ "
World War I												
	7	1923	Oxford	イギリス	西ヨーロッパ	239			ホスト 60	アメリカ 12	仏、独、オランダ 3	"/ "
	8	1926	Groningen	オランダ	西ヨーロッパ	241			ホスト 29	ドイツ 22		松本亦太郎／ "
	9	1929	New Haven	アメリカ	北アメリカ	826	1051		ホスト 87			"/ "
	10	1932	Copenhagen	デンマーク	西ヨーロッパ	?			アメリカ	ドイツ	ホスト	
	11	1937	Paris	フランス	西ヨーロッパ	586		36	アメリカ 29	イギリス 14	ホスト 12	Y. Rikumaru (Tohoku)
World War II												
	12	1948	Edinburgh	イギリス	西ヨーロッパ	688		35	ホスト 57	アメリカ 10	フランス 5	"/ "
	13	1951	Stockholm	スウェーデン	西ヨーロッパ	658		30	ホスト 20	イギリス 14	アメリカ 10	IUSP
	14	1954	Montreal	カナダ	北アメリカ	876	1020	33	アメリカ 54	ホスト 33		
	15	1957	Brussels	ベルギー	西ヨーロッパ	951	1256	47	アメリカ 28	ホスト 20		
	16	1960	Bonn	西ドイツ	西ヨーロッパ	1116	1833					佐藤幸治
	17	1963	Washington	アメリカ	北アメリカ	1902		45	ホスト	“海外からの参加者600名”		
	18	1966	Moscow	ソビエト	東ヨーロッパ	3897	c 4900	43				IUPS (1965) "
	19	1969	London	イギリス	西ヨーロッパ	1921	2385	49				田中靖政
	20	1972	Tokyo	日本	アジア	2164	2562	52	ホスト 50	アメリカ 29	ドイツ 3	"/ "
	21	1976	Paris	フランス	西ヨーロッパ	c 3000	c 3500	64				"/ "
	22	1980	Leipzig	東ドイツ	東ヨーロッパ	4015		58				東 洋
	23	1984	Acapulco	メキシコ	ラテンアメリカ	c 3200						IUPsyS "
	24	1988	Sydney	オーストラリア	オセアニア	4000+		50				"/ "
	25	1992	Brussels	ベルギー	西ヨーロッパ	4000+		70				今田 寛
	26	1996	Montreal	カナダ	北アメリカ	4200	5018	80				"/ "
	27	2000	Stockholm	スウェーデン	西ヨーロッパ	5229	5453	90	ホスト 33	日本 11	アメリカ 10	"/ "
	28	2004	Beijing	中国	アジア	4786	6121	78	ホスト 42	日本 12	アメリカ 8	桑野園子
	29	2008	Berlin	ドイツ	西ヨーロッパ	8132	10000+	110	ホスト 21	アメリカ 8	中国 7, 日本 6	
	30	2012	Cape Town	南アフリカ	アフリカ							繁舩算男
	31	2016	Yokohama	日本	アジア							

L. Delboeuf), 遺伝 (F. Galton), 筋肉感覚等の感覚 (W. James) であった。

- (2) 大会の名称：第1回大会の名称は International Congress of Physiological Psychology, 第2回大会では International Congress of Experimental Psychology に変更され, 第3回以降は現在の International Congress of Psychology となった。
- (3) 開催地：第2次世界大戦までは, 1929年の北米を除き, すべて西ヨーロッパで開催された。1966年のモスクワ ICP は, 西欧, 北米以外での初めての ICP であり, 1972年の東京 ICP はアジアで最初の ICP であった。東京 ICP 以後は開催地は多様化し, 2012年のケープタウン ICP で, 世界の6大陸すべてで ICP が開催されるに至った。
- (4) 開催間隔：初期は3～5年の不定期の開催であったが, 1972年の東京 ICP 以後は, 4年に一度, オリンピックの年に開催されるようになった。
- (5) 阻害要因：2度の世界大戦による中断に加えて, 1936年に勃発したスペイン内乱により1937年にマドリードで予定されていた第11回大会はパリに変更され, またヒトラーによるオーストリア侵攻により, 本来1940年にウィーンで予定されていた第12回大会は, 第2次大戦後の1948年にエジンバラで開催された。また経済不況により1926年にアメリカで予定されていた第8回 ICP はオランダのフロニンゲンに変更された。さらに初期には科学的とは言えない神秘的心理現象の報告が多く, それを排除するために1923, 1926年 ICP では参加

者を制限しなければならなかった。その他, 1913年にアメリカで予定されていた ICP はアメリカ心理学界内の人間関係が問題で不開催となった。

- (6) 参加者数・参加国数：第2次世界大戦前は, 参加者制限の時代も含めて参加者は僅かであったが, 第2次大戦後参加者は漸増している (Figure 1も参照)。第2次大戦後の ICP で参加者数が増えているのは, 旧共産圏での2度の ICP であった (1966, 1980)。なお Table 1 の出席者数・参加国数の欄の「合計」は, 家族などの同伴者を含む人数である。参加者数第1位は通常はホスト国, 他はアメリカであるが, 2000年のストックホルム ICP と2004年の北京 ICP では日本からの参加者がホスト国に次いで第2位に進出している。ただし2008年のベルリン ICP では, 中国からの参加者が日本のそれを上回る結果となった。
- (7) 第2次世界大戦以前の日本からの参加者：日本人として初めて ICP で報告を行ったのは, 1900年のパリ ICP における谷本富であり, 「日本における心理学の歴史」について報告した (佐藤・溝口, 1997, p.53)。また1905年のローマ ICP では, 留学中の元良勇次郎が「東洋哲学における自我の概念」と題して報告している。また1929年の北米のニューヘイブン ICP には, 関西学院の今田恵他, 大脇義一, 寺澤巖男, 鈴木栄吉, 吉岡源之亮が出席した (高砂美樹, 2012/5/14私信)。Figure 2 は同大会の記念写真の一部であるが, 動物心理学関係では, 第2列の左から3人目にパブロフ, その前の白シャツ姿はソーンダイク, パブロフの左

Figure 1. Changes of number of participants in ICPs 1889-2008

Figure 2. A part of the photograph taken at the New Haven ICP 1929 at Yale University

にはラッシュレーの姿が見える。なおパブロフの右側5人目に今田、続いて2人の日本人の姿が見える(関西学院大学心理学研究室80年史, 2012, p.60より)。

2. ICPの主催組織 IUPsySについて

- (1) パリにおける第1回 ICP において、大会の継続的開催のために International Committee が結成され、その下でその後の ICP が約60年間にわたって開催されることになった。日本からは同委員会委員に1905年からは元良勇次郎と精神医学者の榊保三郎(九大)が選ばれ、1926年のフロンゲン ICP からは元良の後を松本亦太郎が継いだ。しかし1929年 ICP 時に、3大会連続して委員会に欠席の者は除名というルールが可決され、1932年 ICP には日本代表は国際委員会から姿を消した。
- (2) 1951年のストックホルム ICP の折に、「基礎及び応用科学としての心理学の発展、展開、進歩を、各国、各地域、国際的に推進することを目指す」国際的組織として International Union of Scientific Psychology (IUSP) が結成され、後の(7)で述べるように、活動の巾を ICP の主催以外に広げるようになった。なお創立会員国はイギリス、フランス、ドイツ、オランダ、ベルギー、スウェーデン、ノルウェー、スイス、イタリア、アメリカ、日本の11ヶ国であった。
- (3) IUSP は会の名称を、1965年に現在の International Union of Psychological Science (IUPS) に改めた。Scientific Psychology という表現が、Scientific でない心理学があると誤解されないためである。なお IUPS という略号については、1982年に Union が国際的な科学学会連合 ICSU (International Council of Scientific Unions; 1998年からは International Council for Science) に加盟するにあたり、国際生理科学学会と区別するために IUPsyS (アイ・ユー・サイ・エス) に変更し今日に到っている。
- (4) IUPsyS は、各国の心理学を代表する1団体(学会あるいは学会連合体)を会員とする団体会員制度を採っており2012年8月現在、会員国は82である。わが国は日本心理学会が会員であるが、各会員団体はその規模に応じて年会費を納入し、それによって Union は運営されている。IUPsyS は2年に1度総会を開き、そこには各会員国から1~2名の議決権をもつ評議員が出席し、ICP 開催年の総会で理事の選挙がおこなわれる。わが国は2名の評議員枠をもっている。
- (5) IUPsyS およびその前身への日本代表理事は、Table 1の右欄に見るように1960年の佐藤幸治を皮切りに、田中靖政、東洋、今田寛、桑野園子がつとめたが、2008年のベルリン ICP の選挙で理事の席を失った。しかし2012年のケープタウン ICP において繁樹算男が理事に選出された。
- (6) 2012-2016年の理事会は、6名の役員(会長、前会長、副会長、事務局長、会計、次期会計)と、10名の理事によって構成されている。会長には南アフリカの Sath Cooper が選出され、現在の理事国はアメリカ、メキシコ、フランス、イギリス、インド、スペイン、トルコ、日本、パハマ連邦、中国である。
- (7) IUPsyS の活動は、ICP の主催以外に、発展途上国の心理科学の促進のために地域学会 (Regional Conference) や ARTS (Advanced Research Training Seminar) を開催する他、次のような各種出版活動を行なっている。*International Journal of Psychology* (1966-), *IUPsyS Directory of Major Research Institutes and Departments of Psychology* (1993-), *Psychology: IUPsyS Global Resource* (CD-ROM) (2000-) の他、*International Handbook of Psychology* (2000) などの単行本も折にふれて出版している。なお上記の Directory は、日本心理学会が1972年の東京 ICP の折に作成した *A Guide to Psychological Institutions in Japan* (後、*Psychological Institutions in Japan*) をモデルにしたものである。

3. ICPにおける日本の心理学の存在感

第20回の東京 ICP までのことは『日本心理学会50年史 [第二部]』(日本心理学会, 1987)の第2章に、また第21回のパリ ICP から第27回のストックホルム ICP までの日本の心理学と ICP の関係については、『日本心理学会75年史』(日本心理学会75年史編集委

員会，2002）の第9章 pp.199-203に記載されているので，ここでは最近のICPにおける日本の心理学の可視度・存在感に焦点を絞って述べることにする。

すでに述べたように，日本心理学会はIUSP（のちIUPsyS）の創立メンバー11ヶ国の一つであり，爾来，2008－2012の一期を除き，理事を送り続けてきた実績をもつ。加えて近年のICPへはホスト国に次いで多くの参加者を送っている。さらに第2次大戦後，ICPを2度開催している国を2度の開催間隔年とともに示すと，イギリス（21年），スウェーデン（49年），カナダ（42年），ベルギー（35年），ドイツ（48年）の5ヶ国であり，日本（44年）もそれに加わろうとしている。

それではICPにおける日本の心理学の存在感，可視度は，このような実績に比例しているのだろうか。近年出席者数においてホスト国に次ぐ実績をもつ日本は，その数に見合った貢献をしているのであろうか。ここでは，2008年のベルリン大会のデータの中にその答えを求めることにする。

- (1) ベルリンICP2008の報告の付録にはInvited contributions: Countries of originの表がある。Figure 3は同表に基づき，国ごとの招待者を全招待者に対する割合で図示したものである。アメリカの18.3%を筆頭に，ホスト国ドイツ，カナダ，イギリスと続くが，日本からの招待者は全体の2.1%である。招待者率を存在感の指標として見れば，日本の心理学の存在感・可視度は高いとは言えない。

Figure 3. Percent Invited Contributions to Berlin ICP 2008 for Selected Countries

- (2) Figure 4は，6大陸毎（ヨーロッパは東西に2分）に招待者率をまとめたものである。大陸毎の心理学者総数が異なるのでこの図は参考程度のものであるが，アジアからの招待者率は第3位を占めている。

Figure 4. Percent Invited Contributions to Berlin ICP 2008 for Each Continent

- (3) Figure 5は，そのアジアの中での国別招待者率を示しているが，日本はアジアの中でもインド，中国に次ぐ第3位であり，IUPsySの創立メンバー国の一つとして，また近年ICPに第2位，第3位の数の出席者を送っている国としては寂しい姿といえる。

Figure 5. Percent Invited Contributions among Asian Countries

- (4) 一方，ポスター発表数においては，Figure 6に見るように，ホスト国ドイツに次ぐ件数である。

Figure 6. Numbers of Poster Presentation for Top Seven Countries

- (5) このようなグラフを見る限り日本の心理学の国際舞台での存在感は決して高くはない。それでは日本の心理学はその実力以下の過小評価しか得ていないのであろうか。ICPの主催国は、招待者の国家間のバランスにも注意を払っているが、招待者として浮上するためには幾つかの要因が関与している。

一つは、国の積極性、あるいは俗な言葉でいえば‘売り込み’の強さである。聞くとところによると、Figure 5でインドからの招待者が多いのは、当初招待者が少なかったインドがベルリンICPの主催者に対して猛然と抗議をし、売り込みをした結果という。良し悪しと真偽は別にして、このような積極性はわが国にもっとも欠けている特性の一つではないのであろうか。またFigure 3に見るように、ホスト国ドイツからの招待者率がアメリカに次ぐ多さであるが、これはドイツの心理学の実力の現れであろうか、それともホスト国の自負と自己主張の強さの現れであろうか。2016年の横浜ICPでわが国はこれに倣い得るであろうか。

招待者の対象となり得るための最大の条件は言うまでもなく研究の水準の高さ、研究事実と理論の国際的注目度である。ポスター発表数が多く、招待者率が低いわが国の姿は、ジグソーパズルで言えば、個々のピースは沢山あるが、個々のピースから作られる全体像において目立ったものがないことを象徴しているのではないだろうか。つまり報告すべき事実は沢山あるが、それらを纏めるフレーム、独創性に富んだ理論的枠組みにおいて、世界の注目を集めるものが少ないのではないか。当然目立つのはピースではなく絵全体なのである。昨年の日本心理学会でのシンポジウムにおいては、筆者はこれを、日本にはfact-finderは多いが、注目されるtheory-builderが少ないのではないかと表現した。

第三の条件として言語の問題があるが、これはここでは論じない。

4. 終わりに：横浜ICP2016の成功に向けて

- (1) 2008-2012の間、日本がIUPsySの理事国としての座を初めて失ったが、それをケープタウンICP2012の総会で取り戻し、理事国として2016年を迎えることができるように努力すること。これは2(5)で述べた通り実現したのは喜ばしい。
- (2) 東京ICP1972と横浜ICP2016とでは、取り巻く状況が非常に異なることを認識し、前回の「過去における最も成功した大会」という実績にまどわされぬこと。これに関して以下3点を述べた。第一は、1972年はまだ戦後色が残っていた時代であり、1ドル360円の固定相場制の時代であったため、

海外からの日本への参加の敷居は低かったのに対して、現在は円高・物価高で知られた日本になっている点。第二は、1972年当時は、今よりも日本人の連帯意識が強かった時代で、「みんなが主役の運営」が可能だったこと。東洋の東京ICPの思い出「柔構造の分業と協力」にあるように、「組織なき組織のまことに奇妙なるすぐれた運営」(日本心理学会, 1987, p.58)が可能であった時代だったことである。日本人はいざとなれば結束する傾向はまだ残っているとはいえ、甘い期待は禁物であろう。第三は、東京ICP1972に対する要求水準は今日に比べて内外ともにはるかに低かったこと。1972年当時の日本は、今に比べればまだ戦後、あるいは‘開国’直後の時代であり、「多くの一流の世界の心理学者が来てくれて、その顔、声を直接見聞き出来るだけで十分」という受け身(receive)意識があったのに対し、今日の日本にはgiveへの期待が内外ともに大きく膨らんでいることである。

このような現実の中で4年後の横浜ICPを成功させるためには、内部にあっては下から盛り上がる力・pushする力の高揚、外部に向かっては日本に引きつける力・pullする力の強化を図らなければならない。そのためには、いささか具体性に欠ける横浜大会のテーマ「Diversity in Harmony: Insights from Psychology」の意味を、できるだけ多く日本の心理学者が共有・理解し、解説できることが望ましい。

引用文献

- Japanese Psychological Association 1972 *A guide to psychological institutions in Japan*. 日本心理学会.
- 関西学院大学心理学研究室80年史編集委員会(編) 2012 関西学院大学心理学研究室80年史(1923-2003) — 今田恵の定礎に立つて — 関西学院大学出版会.
- 日本心理学会(編) 1987 日本心理学会五十年史 [第二部] 日本心理学会.
- 日本心理学会75年史編集委員会(編) 2002 日本心理学会75年史 社団法人日本心理学会.
- Rosenzweig, M. R., Holtzman, W. H., Sabourin, M., & Bélanger (2000). *History of the International Union of Psychological Science (IUPsyS)*. Hove, England: Psychology Press.
- 佐藤達哉・溝口元(編著) 1997 通史・日本の心理学 北大路書房.
(2012.10.8 受稿, 2012.10.10 受理)